
だから、旅

木月 愛美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だから、旅

【Nコード】

N5815B

【作者名】

木月 愛美

【あらすじ】

旅に出よう。そう思った。いい大人が家出なんてかわいくもなるともないな。だけど、旅に出よう。

旅に出よう。そう思った。いい大人が家出なんてかわいくともな
んともないな。だけど、旅に出よう。

小さな鞆を一つ手に持って家を出た。ドアの前で、自分が今さっ
きまでいた家を見上げた。驚いたことに瓦が灰色だった。あれ、瓦
は青くはなかっただろうか。

未来には何があるだろうとか、時代遅れだと嫌っていた学ランを
着て、そんなことを考えながら自分の家を見上げた時の瓦の色は、
確実に青だった。

僕が学ランを脱ぎスーツに着られた間に、瓦はいくつもの至難と
出会った。風に吹かれ雨に打たれ日に照らされた。その結果灰色に
なってしまった。単純にそういうことなのだろう。

「じゃあ、今の僕も灰色かもな」

旅に出よう。短い旅になるに違いない。一週間かもしれないし、
日帰りになってしまいかもしれない。だけど、旅に出よう。

たんぼと畑しかないところに行こうと思う。とにかく遠いところ
に行きたくて、券売機が一番下の段の端のボタンを押した。千六百
二十円。電車賃にはかなり高い。

乗り込んだ電車は混んでもなく、空いてもなかった。席がだいた
い埋まっていて、だが立っている人がぼつぼついる。そんな感じ。
僕は空いていたドア寄りの席に納まった。

電車が進むうち、人の数は一人また一人と減っていった。僕その他
には一つ横の向かいの席の中央に、おばあさんがいるだけだ。電車
の窓って大きいんだな。窓からたくさん光が挿して、僕を照らし
た。いつもの通勤に使う電車が夢の中へ向かう電車になった。

そんな時、聞き慣れた電子音が流れた。穏やかな電車内に鳴り響
いた。

携帯電話だ。

ジープのポケットから携帯電話を取り出し、思った。なんで僕は携帯電話なんかを持って来てしまったのだろう。全部を断ち切つて、旅に出るつもりだったんだろ。なのになんで、こんな現実の塊みたいなものを持って来てるんだよ……。

最初からわかつていた。僕はいろいろなものに縛られていること。着信音は鳴り続ける。僕の現実の塊が。現実から逃げようと思つたのに。旅に出ようと、夢の中を漂おうと思つたのに。

僕には勇気がない。踏み外す勇気なんかは大きな現実の塊と比べたら、決して及ばぬ欠片にすぎない。最初からわかつていた。

眩しい太陽の光。それに照らされる、全てのものが輝いていた。携帯電話の着信音はいつもより軽快に鳴る。

青が灰色より優位に立つと誰が言つたのだろう。現実より夢の方がいいと決めたのは？ 現実とは違うから現実なのだと、説いたのは誰だろう。

よく考えてみた。

よく考えてみたら、全部僕だった。

弱い弱い僕自身だった。

旅に出よう。同じような日の繰り返し。朝起きて会社に行つて御飯を食べて寝る。昨日も今日も明日もたいして変わらない。だけど、それが僕の旅なんだ。

瓦の色は青から灰色になるし、今の僕は学ランを着ていない。たいてい変わらない毎日だけど、着実に変わっている。確実に進んでいる。それらが立派な証明だ。

だから、旅に出よう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5815b/>

だから、旅

2010年11月17日03時13分発行